

漱石の呪いを

イチ

まったくもってくだらんというやつである。

まったくもってなんて言い方は普通しないし、くだらないという言葉もあまり使わない。くだらん、なんて乱暴にくだらないう言葉は私には気がひける。

ただ今の気持ちは、まったくもってくだらんという言葉の持つニュアンスがぴったりだ。

そう、まったくもってくだらん。どうでもいい、とか、しようもない、とは違う。

私は秋めく昼下がりに、瓦解した家の前に立ち尽くしていた。

自分の家が、内と外を混ぜこぜにして半分くらいの体積に圧縮されてしまうと、がっかりして、不安になって、取り乱すものだと思っていた。ただ実際は、力が抜けて、何も考えたくなくなつて、そしてどうでもよくなる。私には新発見だった。

失ったものは数えきれない。兄からのオーストラリア土産の人形、ひんやりして居心地の良かった廊下、今朝冷蔵庫のなかに作り置きしておいた炒め物、それと冷蔵庫……それらは全て、築五年の一軒家を構成していた柱や壁の下にある。

得たものは……新発見が一つ。家が無くなると、まったくもってくだらん、という気持ちになる。

その言葉の意味は傍に置いておいて、言葉の響きや発するイメージそれだけが重要になることもあるのだ。

周りを見渡すと、目に入る建物は大体崩れ去って、私と同じように呆然とする人々があちらこちらで目に入る。遠くから子供の声。

ピントが合うように段々と、辺りを満たしている悲痛に叫ぶ声が聞こえてきた。おやおや、向こうでも、その向こうでも、大変なことになっているようだ、とそんなきながらぼんやりと気づきはじめた。土の匂い、鉄の匂い。私は血溜まりの中に立っている。

みんなはまったくもってくだらんと思っていないのだから。いつの間にか赤に滑る指先を擦りながら当て所なく考える。思考停止に陥っているのは私だけなのかはた、思考停止というのは恐ろしいものである。自分ではそれと気づかずかすかに誤った方向へどこまでも行ってしまうのだから。もしくは、何も打開策を講じることなく、ただ時間をどぶに捨ててしまう。

この「どぶ」は私の目の前にある、足元のこのどぶのことであるかもしれない。小さい頃はよくここに落ちたものだった……その度に母は私をしっかりと、機嫌が悪くなった。私は常々母を度量の狭い女と思っていたが、彼女

の身になれば怒って当然かもしれない。中学卒業の折、ふと考えがいたって、私は思春期の精神を脱したことを了々自覚した。

ただ、今ではそのどぶも、側面が折れ、水が道路の裂け目へこぼれ出ている。流れによってプラスチックの人形が水面をくるくる回っている——やにわに、私は汚い水がしたたるさまを漫然と眺めている己を自覚した。あぶない、完全に時間をどぶに捨てていた。これではつきりとした。私は思考停止に陥っているのだ。

私はさしあたり歩き出すことにする。近所の人に話しかけられては迷惑である。

思考停止から私を解放してくれるのは、論理でも根性でもなく時間なのだ。気の向くままそこらを歩くうちに、私の脳が活動を再開するかもしれない。ただ突っ立っていても逍遙していても同じことなら、情報収集をしていた方が幾分かましである。間違えた道に進むかもしれないが、その時はそっくりそのまま引き返せば良いのだ。もしかしたら、正しい道を行くかもしれない。不安になつたり悲しくなつたりするのはその時になつてからで良いだろう。

さて、気の向くままに阿鼻叫喚の修羅の道を歩いてい

くと、筋向かいの人影に目が留まった。倒れた石塀に腰掛けてがっくりと頭を下げ、両膝の間にうずめている。身じろぎもしない男が晒すうなじに、私はなんだか見覚えがあるような気がした。嫌な感じだ。

できれば気づかない振りをして通り過ぎたかったが、その男から離れようと道路の左端を通ると、今度は頭が潰れて錯乱し、手足をばたつかせている人に近づくことになるので、それも嫌だった。医師免許は持っていない。仕方がないので出来るだけ足音を立てず、かつ早足で彼のそばをやり過ぎすことにした。姿を横目で確認しつつ、足元に注意を払って進む。転倒は言わずもがな、定規を踏んで埃を舞いあげるとか、ビニール袋を蹴って音を立てるとか、注意を引くことは絶対にしたくなかった。しかし、その男はふと顔を上げ、私は慌てて顔を背けた。

なぜ、急に、顔を上げた？

どうしても顔が強張るのを恨めしく思いつつ、彼が気づかないことを祈ることしかできなかった。

一瞬。

「市田あ」呟くようなかすれた声。

私は腹をくくった。足を止めて鈴木に向き直る。「久しぶり」あんたには会いたくなかったよ。

一年ぶりくらいの鈴木は、元気がなさそうに見えた。前から省エネなやつだったから、健康的とはほど遠い生活にあるのだろう。もしくは、彼の自宅を石塀が押しつぶし、窓ガラスが全部割れて、バルコニーが今にも崩れ落ちそうにゆらゆらしているせいかもしれない。

「今何やってんの」

「何も。座って、途方に暮れてると」

私は、彼が働いているのか学生なのかを聞きたかったのだが、彼は潰れた家と混乱した状況以外のことは考えられないようだった。

「見てよ、これ。酷いね。おれは外にいたからたまたま怪我なかったけど、中にいたら死んでたかもよ」

「そうね」

「どうしようもないね。父さんがどっかいっちゃって、全然分かんねえの。まずいね」

「うん」

「市田はどこ行くとこだったの」

行き先は特にない。ただの散歩である。でも、これをそのまま伝えて更に突っ込まれるのは避けたい。

「別に。避難所でも覗きに行こうかなって」

鈴木は笑顔で立ち上がった。

「行こう」

めまいがする思いだった。

こうなると思った！私は心の中で叫んだ。どうして私

と来たいと思えるのだろうか。謎に人懐こくて考えなしのその胸中は計り知れない。こいつは通り過ぎる車に友達の親が乗ってるのを見つけたら手を振るタイプの奴だ。実際、私の母の車を知っている。

昔のこととはいえ、付き合って三日でフラれた気まずさは無いのだろうか。私はこの一年間、やつと顔を合わさないことを第一に行動してきたのに。この気まずさは多分死んでも変わらない。私は地獄の底でも奴から逃げ続けるだろう。

「ここでお父さんを待ってた方が良いんじゃない。すれ違っちゃうよ」

私はやんわりと断った……つもりだった。

「ん、でも、ここにいたってしょうがないし。一昨日からさあ、日没後は寒いんだもん、おれ今ガソリンスタンドで働いてつからよく分かんぬ。秋って寒い」

「そうかな」

「うん。暗いし。暗いし寒いよ、秋は」

秋は暗いし寒い。そうかあ、と私は言った。そうとしか言えなかった。

結局、鈴木はついてきた。

まったりとしてあくびの出そうな午後、私たちはどこかもわからない避難所目指して漫ろに歩くことになった。

道路向こうの不運な負傷者は、いつのまにか痙攣をや

めて静かになっていた。

*

鈴木とは小学五年生の春に出会った。

といっても、鈴木は転校してきた私の隣のクラスの不登校児だったわけだから、交流はおろか顔を見たことも皆無だった。

ただ一つ、私と同じ名前であるということ、そのことが興味を引き、私は度々鈴木に思いを巡らせることがあった。なぜ学校に来ないのか、家で何をしているのか、自分と同じ名前の人間が隣のクラスにしていると知ったらどう思うだろうか。

しかし小学校の卒業式にも鈴木は来なかった。

殆ど持ち上がりの中学校に入学し、相変わらず鈴木はいない中、私はそれなりの人間関係に悩み、それなりの欺瞞と悪意と優越に些か苛まれることとなった。吹奏楽の為の楽譜に挟み込まれた嫌な気持ちはどうしようもなく膨れ上がり、時の経過はなんの逃げ道も解決法も指し示さなかった。

ある朝、教科書を詰め込んだリュックを背負って玄関を出た途端、首からお腹が締め上げられるように苦しく、足元が遠くに伸びていくように感じた。私は数十分その

場に立ち尽くした。あつという間に時は立ったのだった。そういうわけで私も立派な不登校児となり、日がな家でゴロゴロしている身分となった。何をしていたわけでも無いが、リビングに寝っ転がり、ふと窓から西日が射しているのに気がつく時、何時間も泣き続けた事もあった。しかしそういう時でも、不思議と両親が帰宅する直前には涙がびったり止まり、わたしは平然と顔を洗ってテレビをつけ、溢れる笑い声と共に出迎えたものだった。鈴木のこととは考えなかった。まったく。私は名前をなくした只の子供だった。

暫くして矢庭に、クラスメイトの顔が頭に浮かんで何となく会いたくなかった。恐怖も気まずさも何処かへ行ってしまったようだった。不思議なことに家族は当たり前のように私を送り出し、当たり前のように生徒や先生も私を迎え入れた。ぽっかりと穴の開いた五ヶ月は幻のように消え去った。私はあつという間に普通の中学生に変身してしまった。

そして、私が戻った学校には鈴木がいたのだった。

*

「すいません」歩いているとふと声をかけられた。右斜め後ろ。鈴木が振り返った。

「この道行っても行き止まりです。すごい火事になっ

ちやつて危ないですよ」

「え、火事？ 大丈夫なんすか？」と鈴木が足を止める。私は数歩のち立ち止まった。

「大丈夫じゃないです。いっぱい人死んでるぽいですが、消防車も多分来ないしそもそも携帯も通じないし、凄く熱いんで行かないのが安全ですよ」

「そうですか…ありがとうございます。あの、どこ行くんすか」

手当たり次第にパーティを掀げる鈴木に辟易することは底なしのようだ。私がこれ以上なくうんざりしても、奴は更に容易に超えてくる。ここに究極と永遠があるのかもしれない。

しかし親切なその人はまともな感性をお持ちのようで、「まあ、知り合いのところなんか…」と濁して返す。流石に無理強いはいしない鈴木が挨拶もそこそこに歩き始めた。

鈴木が視界の右端に入ったところで、私も奴を視界から追い出すように勢いよく歩き出す。すぐ左に曲がり、そしてまた左。なんとなく右に逸れつつも道なりに進み、二車線の国道に出た。車がずらりと並んでいる。

「この車の人たちどこへ行ったんだろう」鈴木は呟くようにいった。「父さんの無いい」

看板は外れかかり、割れた窓ガラスが歩道の上で陽を

受けてキラキラ光り、そこに俯く赤剥けの肉体があるにも関わらず、いつものことのように秩序だった様子で車は列を作っている。鈴木は割れたコンクリートの一部を手に拾い、洪緑のクーペのこめかみに打ち付けた。

サイドミラーが転がる。私はそれを拾った。自分の顔を写すと、笑っちゃやうくらい酷い顔だった。そうやって笑うと目が小さくなり頬が盛り上がり、余計酷い顔になって今度は悲しくなった。

鈴木が横から手を出してその四角いサイドミラーを掠め取った。

私も歩道の隅に落ちていた鍋の蓋を拾って、SUVのサイドミラーを取ろうとした。だけど小さな球の取手を握っていは力が入らず、ちよつぱり塗装を剥がすだけ。5さらつとした白が引つ搔かれてシルバーが覗く。

結局私は白くて丸くて大きいサイドミラーを手に入れることは叶わず、土と草の匂いが染み付いた鍋蓋だけが手の中にあった。

*



新入生として輝く廊下を闊歩していても、私は鈴木に暫く気がつかなかった。矢張り同じクラスでは無かったし、久し振りの友情活動に忙しく、いない筈の存在に気を留める暇がなかったのだ。居心地の悪い吹奏楽部をスッパリとやめ、私はバドミントン部に入部した。部員は温かく迎えてくれた。

その中に私は自分と同じ名前を見た。一年半のうちに漸く出会った鈴木は普通の奴のように見えた。普通に動き、普通に話し、普通に笑った。成長期特有の裏返り勝ちの不安定な声や片側だけにやたらと現れる笑窪も、瘦せた臉に包まれて少し斜視の入った目なんかも、特に印象深いものにはならなかった。

私達は時たま言葉は交わしたが、特別仲の良いものでも無かった。

すぱり、と振り抜いた腕を肯定してくれるような音が気に入って、私はバドミントンに打ち込んだ。練習は好きだ。反復するだけで、考えなくとも理想的な形に体が動き、自分が変わっていくのを感じる。

ただ、その頃には既にチームメイトの団結感を煙たく感じるようになっていた。自虐で固めた自意識に圧迫されて応援も練習さえも嫌になり始めた時、鈴木が事件を起こした。

中学二年の秋、部内はぴりつとした雰囲気だった。弱

小チームのくせに一端に有終の美を飾ろうとなにやら一生懸命になっているようだった。私が体育倉庫から丸めたネットを腕いっぱい抱えて出てきたところ、入れ違いに鈴木が体育館を出ていった。見れば三年生の先輩の一人が体育館の中心に座り込み、それをみんなが固唾を飲んで見つめている。

張り詰めた空気に訳もわからず、私は壁際にネットをゴロゴロと下ろした。一つが尾を残しながら巻きの通りに転がっていく。私はそれを追いかける。顔を上げると目に涙を溜めた先輩が私を見つめている。しまった、近づきすぎたと思った時にはもう遅すぎて、私が彼女と目を合わせたところを全ての部員が見た。もう声をかけないわけにはいかなかった。

——その日の放課後、部室の鍵を返すために職員室に向かったところ、会議中の札が下がっていた。私はオレンジ色に照る廊下にもたれて鍵を弄びながら会議が終わるのを待った。

首が痛くなってあちこちに動かしていると、右斜め向かいの柱の影に何か動くのを見た。誰かがしゃがんでいった。

深く俯いているのを良いことに、誰だろうと遠慮なく視線をぶつけていると、ぱっと顔が上がった。鈴木だった。鈴木もこつちを見ている。私は目を逸らす機会を失

って、視線はそのままに焦点は遙か遠くに向けてちよつと固まつてしまった。

再び話しかけなくてはならない気になった。

「大丈夫？」私の馬鹿みたいな質問。心配しているようにさえ聞こえない。

「中でおれの話してんだよ」呆れちゃうよな、といった風に聞いてもない説明をする。外に漏れ出る端端の会話から推測できるものだ。

沈黙。私は訊かなくてはならない気がした。

「なんで秋津先輩殴ったの」

「逆に訊くけど、なんで誰も殴らなかつたの」

「は？」

「ちよつとどうなるのかな、と思つただけだよ。頑張つて部員を叱咤激励しているところにおれが出ていってちよつと叩いてみたらどうなるのかなって」

「で、ほんとにやっちゃつたんだ。」

「まあね。」

ふーん。この部活でたった一人、まじで変な奴なんだな。

「大橋先生ちよつと驚いてたね」

「うん」

結局鈴木を考えていることは全然わからなかつた。分ちからなくても引け目を感じる事がなかつたので、鈴木の

側は楽だつた。昔の人が言つたように、上善は水の如しだ。低みへ流れていくのは自然なことで、逆らふ必要は無い。その開けつ広げな態度もなんだか気に入つた。

私はだんだんと、普通のコミュニケーションを手放し鈴木との特殊で無感動な交流に傾きつつあつた。

*

私たちはついに各々の武器を手に、今では臨時避難所である我等が母校、鹿名第三中学校に辿り着いた。正門には大仰なバリケードが築かれ、侵入するのは骨のように思われたので裏口に回ることにした。裏口の門は施錠されていたが、簡単によじ登つていく事ができるものだ。7
校内は慌ただしく、たくさんの人が立ち働いている。重い段ボールやかさばる瓦礫なんかを抱えた人の間を縫つて体育館玄関から中に入ると、透き通つた空気がたちまち濁り、水滴の滴る音が空気を細断する薄暗い空間がそこにあつた。

とりあえず近くの階段を登つて二階、三階、そのまま四階へ。人々のざわめきは遠く聞こえる。

「何段昇つたと思う？」と戯れに言うのと、

「五百段」と既に軽く息を切らした鈴木が返す。

「分かる。しかもここ三万階建の超高層校舎だから屋

上までは相当だよ」

「おれは四七階でリタイアする。おれの意思は市田が継いでくれ。」

階段は屋上まで続いていると思つたが、お待ちかねの四階は見渡しても窓と廊下と家庭科室だけだった。

「おい、やったぞ。三万階まで来た。けど無駄足だったみたい」

「あれ、屋上つて裏から行けなかつたつけ？新校舎からだったかな」と四七階を逃した男が言う。私達はぶらぶらと西へ廊下を歩いた。

明らかに壁の色が変わる一瞬を通り過ぎると、私達が入学する二年前に増築された新校舎に入った。そこそそ著名な建築家に頼んだらしく、彼の夢と挑戦に彩られた装飾過多の悪評高い内装に再会し、改めて苦笑が込み上げる。何も変わっていない。

私達は連想の力に身を任せて口の動くままにくだらない雑談を繰り返しながら、壁の抽象模様が煩い新校舎の階段を昇り始めた。

踊り場を折り返して屋上へ続くドアを見上げる。隙間から光が洩れている。

「開いてる？」

私は先行していた鈴木に声を掛けた。鈴木は答えずに、ドアノブをガチャガチャやってみせる。鍵がかかつてい

るようだ。

「まあ昔もそうだったしなあ」

私達は二人並んでドア傍の空間に足を投げ出して座つた。

*

私と鈴木はよく屋上のドア前で他愛無い話をした。毎日の昼休み。放課後。何となく怠くてサボった授業でも、そこに行つて本を読みながら奴を待った。

鈴木との交流に反比例するようなクラス活動からのフェードアウトの末、私と鈴木は完全に浮いた存在となつた。常に二人だけで何処とも知らぬ場所へ消えていく、噂の的に度々なっているのは知っていたが、お互い特に気にする事はなかつた。平穩な日々だった。

暫くして屋上前ですることに勉強が混じり始め、春になり二人は同じ高校に進学した。些末な変化はあったものの交流の大部分を占める相手は何も変わらず、私達は矢張り閉ざされた屋上のドアの前にたむろしていた。

ある日の英語グループワークの折、同じ班の女の子が雑談の中で私に尋ねた。

「ねえ、たまきちゃんつて鈴木くんと付き合ってるんでしょ？」

考えてみれば直接確認してきた人は初めてだったので私はおや、と思った。周囲の人間も反応して、耳をそばだてているのを感じる。

そして、自分の発言に全く責任を持たない鈴木との会話を毒されすぎたせいも、机の下でこっそり開けようとしている飴玉に意識がとられていたためか、意識しないままに私はなんと「ん」と答えていた。

その子を含め班員がにやにやする中、私は一人漫然と後悔していた。あーあ、遂に言質を取られてしまった。恐らく私達は何も変わらないものの、周囲の目は変わるだろう。全く面倒な事ができてしまった。

早速ながらその日の放課後に話の流れから鈴木に話してしまい、私は盛大におちよくられた。そして「まあ、それでもいいんじゃない、別に」と奴が言って、またいつものお喋り。それから私達はなんとということもなく付き合うこととなった。私は何も変わらないと思っていた。

*

外界との心地よい隔絶を久し振りに感じながら、たちまち私達は中学生の頃に戻ったような意味のない会話を重ねた。

「それは中学生の私に言ってくれ」

「今もあんま変わんねえよ」

「……ねえ思い出したんだけど、このドアもうちよつとで開くところだったじゃない？」

「あ」

途端にテンションが上がった二人は、破壊間近まで漕ぎつけたはずのドアの鍵を確認することにした。卒業式の直前、最後に一度だけ屋上に入ってみたくなって二人でドアノブに繰り返し石をぶつけていたのだが、遂にタイムリミットが訪れて断念に終わったのだった。

果たして、ドアの鍵は数年前の努力と経年劣化のおかげで数回衝撃を与えただけで壊れてしまった。ドアは遂に開かれた。

吹き込む冷気と入れ替えにして期待を胸に外へ出ると、清々しい空は真赤に染まっていた。すっかり冷えたゆるい風が頬を撫で、新しい景色に感嘆の声が漏れる。屋上は殺風景で思っていたよりも狭く、人の出入りを前提にしないためか柵のような落下防止装置もろくに無い。縁に近づくとなんの遮りもなく街を見渡すことが出来る。

全ての音が遠くに消え、ゆっくりと流れる雲、ゆっくりと沈む斜陽。冷え込む秋の闇にそそくさと足を急がす人々。半壊のままなんとか姿を保っていた建築物がとうとう埃をあげて倒壊するさまがやけにゆっくりと見える。

その感動的な光景にも割と数分で飽き、寒さに文句を

言いながらさつさと薄暗い階段踊り場に引っ込んだ。

「おれの言った通り寒かったしょ」

「うん」

「これから暗くなるから見てるよ」

「うん」

帰る雰囲気になったのを感じた。

「市田と久し振りに話せてよかったよ」

「ほんと久し振りだったよね。高校終わってからも会ってないし連絡つけてなかったもん」

会話が途切れた。なのに鈴木は歩き出さない。珍しく何か言いたげだがぐずぐずしている鈴木を前に、私は動揺し少し緊張してしまった。

「あのさあ」

「ん」

再び沈黙。いい加減はつきりしろよ、という言葉が喉元まで出かかると。

「あのさあ、今まで俺のこと避けてたよね、なんで？」

そりやもう付き合うのやめたけどさあ、友達でもなくなったわけじゃなくない？ また遊んでよ。ガソリンスタンドに来いよ」

鈴木は愚痴っぽいおどけたような言葉に、衝撃、私は途端に逃げ出したくなった。

避けていた。確かに私は鈴木を避けていたが、そのこ

とについて鈴木が何か考えることがあるとは思議と全く想像できなかった。

「人の心もあつたんだね」と軽口を叩くので精一杯だった。

そのまま私と鈴木は階段を降りたが、その間私は過去の行為をいちいち振り返るので頭が一杯だった。

軽い気持ちで恋人同士となってしまうその日から、私は鈴木に対して今までと同じ態度をとることはどうしてもできなかった。奴の顔を見るたびにこみ上げる感情に直面して私は逃げ出すことしかできず、彼の挙動一つ一つに苛ついた。

限界だった。結局逃げ道のない不快感に耐えられず、三日ののちに「あんたとはもう会わないから」と伝えるだけで一切の交際を断ってしまった。

それが高校一年生の五月、幸いまともな人間社会に戻っていきただけの時季の早さは保っていた。

そこそこの友達グループに入れてもらい、そこそこの時節行事を楽しみ、節度と思いやりの数年を過ごした。そのまま一度も後ろを振り返らずに地元を抜け出すため大学へ進んだ。

それから今まで、何も無かった。

外はずでに夜だった。行きと同じ裏門から学校を出て、

行きと同じ道を辿って各自の家へ向かった。普段は夜道を照らす街灯たちも、今はなぎ倒され折れ曲がり、光るどころではない。

でも、真つ暗ではなかった。満月が照っている。

「お、月が……」

あぶない。私は続く言葉を飲み込んだ。過去の失敗が背中に張り付いて自意識が過剰であるばかりに、この言葉を口にするのは私が許せない。気怠げな口髭のおじさんが日本人にかけた呪いみたいなものだ。

「だけど鈴木は、「ん？ ああ、月が綺麗だね」私の言葉を引き取って続けた。月が綺麗、それ以外の含意はこれっぽっちもなく、ただ素直に言っただけだ。

私はその手垢の付いたはずの台詞に新鮮な驚きを感じて、頭上の満月をつくづく見上げた。黒々とした夜闇にぽっかりと穴が空いたような月が浮かんでいる。

「こういうところが好きだったんだな、はつきり思いました。」

「なんのしがらみもこだわりもなく、はっとするほど静かな水面、頼もしく輝く満月を鏡のように映し出している。まあ、単に頭が空っぽなだけなのだが。」

「そう、こういう人間だから好きなんだ。別れた時より前から、付き合った時よりもずっと前から。」

「ねえ、鈴木さあ……」言葉が出ない。こいつならなん

て言うかな。

「あのさ、私と友達になってよ」

鈴木は凄じい勢いで笑いだした。嫌な気はしなかった。